

ママ.....

ぼくガンなの？

ある父親の愛と悲しみの記録

杉本要吉

ある父親の愛と悲しみの記録

ママ………
ぼくガンなの？

杉本要吉

毎日新聞社

筆者略歴 杉本要吉(すぎもと ようきち)
1919年新潟県生まれ。1941年上海東亜同文書
院卒、同年毎日新聞入社。東亜部、香港特派
員、学芸部、訪中2回、外信部、調査部副部
長、論説委員をへて現在、編集委員としてア
ジア調査会。

現住所 東京都豊島区要町1-41

ママ、ぼくガンなの？

¥350

昭和42年12月10日 第1刷

昭和43年1月10日 第3刷

著 者 杉 本 要 吉

発 行 者 星 野 慶 栄

発 行 所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区竹平町
大阪市北区堂島
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

印刷 凸版印刷

製本 佐久間製本

目次

口 絵

文夫の骨を虫が食っている

青天のヘキレキ(セ) 即日入院(九) 病いにおかされるまで(一四)
すはらしい体格の持主だった(一八) がんセンターへ移る(三〇) コ
バルトの大量照射(三三) こども専用病院の必要(三六)

左腕を切断しなければ……

淡々として手術を受けた(三三) 文夫の日記(三六) 透明の腕がいた
いなあ(四〇) かんづめがあげられた(四三)

七月退院

七十三日ふりに我か家へ（五）
学校へ（五）
ピアノがひける（五）
山梨の林間

学校にもどった

片手がなくても恥ずかしくない（六）
害者（六）
文夫の合理主義（七）
一本のストックでスキーを
春休み（六）

教育大学付属中学へ進学

学級委員に選ばれた（七）
腕立て伏せ・とび箱・英語（七）
片手
で千五百メートル泳ぐ（六）

ふたたび入院

七の数字のジंकス（二五）
再発してしまった（二五）
三十五回の
リニアノク照射（二）
ある少年の死（二五）
秋晴れの日の退院（二五）

また学校へゆける

一人では通学できない（二二）
パパ、中国へはゆかないの？（二二）

ついに歸らぬ入院へ

右肺中葉に白い部分が……（二三）

『あゝ同期の桜』を愛読（二三）

あと六カ月の宣告

すでに肺に転移していた（二三）

このまま死なしてなるものか

ズボンのまま五カ月泊まり込む（二四）

『牛乳の歌』（二四）

夾竹桃が

早咲きした（二四）

苦しみの日日

セキがひどく、食欲がない（二五）

酸素テントのなかの五十日（二五）

スリノバは、もういらぬよ（二六）

最後の一カ月

からだじゅうの血はみな他人のもの（二六）

痛い、苦しい、あのネ、あ

のネ、（二六）

いのちのきわみ

呼吸の数が十二に……（二七）

ともし火は消えた（二七）

永遠のわかれ

お通夜と告別式（二七）

柩は級友たちにとりまかれて（二八）

掌中の玉をうしなう

“ガン”という悪魔め！（二八）

ママ、いつまでも元気でいてね（二八）

こぼれはなし、あれこれ（二九）

文夫の作文（二九）

級友のみた文夫（三〇）

小児カン医療対策への意見

かずかずのながい体験（三二）

計画的な専門病院の設置を（三五）

文夫の畧歴（三二）

ママ、
ぼくガンなの？

文夫の骨を虫が食っている

青天のヘキレキ

文夫がまるで青天のヘキレキのように、骨のガンである「骨肉腫」と宣告されたのは、昭和四十年の五月七日であった。

昭和四十年という年は、いま思いかえしてみると、私にとっては最悪の年であった。

二月はじめに、新潟県のいなかにいる私の生みの母が病氣になり、もう長くあるまいというので見舞いに行った。母は結局、二月二十二日の朝になくなった。お葬式の日はそのすごい吹雪で、私たちはいなか式の屋根のない火葬場において、母を焼いたときぎの火で体を温めあう始末だった。

母は生前、文夫をとくにかわいがってくれていたのに、そのお葬式に参列できなかった文夫

は、三月の末に、ちょうど学年末の休みをさいわい、ママと二人で三十五日忌と納骨式のためいなかへ行った。帰りには、親類からもらったお餅やお米などのおみやげをいっぱいもって、二人ともうんうんいいなからもどってきた。

四月になって、丈夫は東京教育大学付属小学校の六年生に進級し、いよいよ中学校に進学する最後の仕上げにかかろうとするときであった。始業式が終わって間もなく、丈夫は左肩のあたりが変で、左腕が上がりにくくなった、と言いはじめた。四月十日に、かかりつけの近所のS医院に連れて行き、診察を乞うたところ、肩のつけ根のあたりの筋肉炎か、あるいは子供にはあまりないが一種の神経痛カリューマチではないか、ということ、しばらくはその治療をつづけた。しかし一向に効果はあらわれなかった。そればかりか、はじめは肩と垂直の線まで上かっていた左腕が、だんだん上がる角度が小さくなってくるのであった。

四月も終わろうとするころ、不安に感じた私たち夫婦は、S医師にどこか大きな病院で診断してもらえるように連絡を依頼した。丈夫は学校を休むことが大きらいだったので、授業予定とも調整して、たまたま五月七日は付属小学校の子俱会で授業がないことがわかったため、その日に日大板橋病院で診察を受けることに決まった。

六日に妻の姉の子供、つまり私たちのおいの結婚披露式があった。

おいは式が終わると、その晩すぐに勤務先である秋田県尾去沢に出発した。私たちは一家そろ

って、新婚の二人を上野駅で見送った。

この時、文夫は、なぜか制服に着かえて出掛けるのをしぶったが、私たちは、昼間のはげしい運動の疲れのせいだろうと軽く考え、文夫をせきたてて上野駅に行った。その時、上野駅のホームで写した写真か、文夫の五体完全な最後の制服姿の写真になろうとは、神ならぬ身の私たちに知るよしもなかったのである。

五月七日の朝、文夫はママにつれられて、自宅からあまり遠くない板橋区大谷口の日大板橋病院に出掛けて行った。

即日入院

「モシモシ、パパですか、文夫の骨を虫が食っているんですって、すぐ入院しなければならぬの、いそいで来てくださいな」

当時、論説委員であった私は、毎日、正午から開かれる社説のテーマ決定会議も終わって、その日は、執筆の責任もないままに、一息入っていたところであった。ママから電話を受けると、事務のN女史から若干の金を借り出して、私はすぐに病院へかけつけた。病院前の桜並木はすっかり美しい葉桜に変わって、濃い影を地面に落としていた。

一時すぎの病院は、のびた午前の診察がようやく終わって、昼休みといったところで、広い待合室にもほとんど人影はなく、文夫はママと二人で片隅の長椅子に腰掛けて、少年雑誌のマンガを読んでいた。

私が近づいて声をかけると、文夫はすぐ顔を上げたが、「また入院で悪いな」とでもいうように、すまなそうな、ちょっとテレた表情を見せたのを、私はいまでも忘れることができない。

文夫は三歳の時に猩紅熱（法定伝染病）で板橋区大山の豊島病院に隔離入院させられ、また付属小学校に入学するしばらく前には、盲腸手術のため、この同じ日大板橋病院に入院したことがあり、こんとは三回目の入院になるのだった。

私は、「骨を虫が食っている」という妻の言葉だけでは何もわからないので、一刻も早く病状を知りたいと思って、看護婦に担当の医師をさがしてもらったが、昼休みで見つからなかった。

そこで、とりあえず入院手続の書類を作りましょう、という看護婦の申し出にしがって、健康保険証を差し出すと、妻と娘二人、息子一人の家族の名前を見ていた看護婦が、

「男のお子さんは一人しかないんですか」

とひとことだけ言った。

この一瞬、私は文夫の病気が、まことに容易ならぬものであることをきとった。

やがて、診察に当たった医師に呼ばれてゆくと、文夫の左腕はレントゲン写真撮影、検査の結

果、上腕骨の肩に近い先端に「骨肉腫」があること、悪化を防ぐためにすぐ左腕を切断しなければならぬこと、それでも生命の保証はできない危険な病気であることを知らされた。

私は目の前がまっ暗になり、まるで高い山の上から谷底へつき落とされてゆくような気持ちになるのを、どうすることもできなかった。

入院したのは「一の二階一一号」室、外科のおとなばかりの大部屋で、子供にとってはかわいそうだった。それでも同室の人たちは、きょう診察を受けて即日入院できたことを、うらやんでいた。文夫は、ベノドに掛けられた「腫瘍」という病名の字が読めないらしく、ふしぎそうな顔をしてながめていた。

間もなく、かかりつけのS医師がやってきてくれ、文夫の病気の重大なこと、治療のためにはこの病院よりも、ガン専門の「国立がんセンター」に移すべきだが、がんセンターはなかなか入院困難なので、しかるべき筋を通じて依頼する必要があること、などを教えてくれた。

もはや夕方近くになっており、どこへも連絡しようもないままに、私たち夫婦は、とりあえず文夫の入院生活に必要な品物を取りに自宅に帰りたい、と申し出ると、看護婦は、

「子供さんもしょに連れて行って、家で夕食を食べさせ、消灯までに戻りなさい」といってくれた。

その日の夕食は、文夫の好きなにぎりズシとイチゴだった。これが文夫にとって、わが家での

最後の食事になるかもしれないことを知っている私は、一人前では足りない文夫に、私の分まで食べさせようとすすめてみたが、文夫はなせか遠慮して食べようとはしなかった。

再び病院に連れ帰り、私たち夫婦は消灯まで付添って、文夫ひとりを残し、家に帰ることにした。

ママはそれまで文夫の入院について、『虫に食われた骨』を削り取るくらいに考えていたらしい。しかし、私が帰り道ではじめて真相を打明け、最低限度でも左腕は切断しなければならぬ、と告げると、それこそ狂気のように泣きくずれてしまった。

その日の日記(のちに作文の形に直して学校へ提出したもの)に、文夫はつぎのように書いています。

五月七日(金)　きのう、居残り運動で野球をした。いたい手をおしてやったのだが、いまから考えれば、やってよかったと思う。

朝九時に、板橋日大病院に行った。すごいこみようで、診察を受けたのは、午前十一時三十分を過ぎていた。

太田先生という先生だった。一応見てから、いろいろな検査をしてくださいと、検査の用紙をくれた。

血液検査、レントゲン撮影などの検査をして、結果を待った。

レントゲンの写真かできたというので、取ってきて先生にわたすと、他の先生がたもよってきて、

「はっきりしてますなあ」

と言っていた。少したつと立ちあがって、

「入院したほうが、いいですね」

と言った。

そしてかんこ婦さんにベノドの事をきいて、きょうから入院することになった。

一たん家に帰って、用具をそろえ、夕飯を食べてから病院に行き、病とうにはいった。一部屋六人だが、板の間をカーテンで仕切ったような所だ。

夜は、なかなか寝つかれなかった。

今後、ぼくはどうなるのだろうかとか、いろいろなことを考えた。

翌八日と九日の日曜日との二日にかけて、日大病院では文夫の全身のレントゲン写真をとったり、血液検査をしたり、家族のことを聞いたりした。一つのことか終わって、病室に帰り、ベノドにつくと、すくまた呼はれるので、「夜はくたくたになってしまった。けれども、なかなか眠れなかった」と、文夫の日記には書いてある。

病いにおかされるまで

文夫は昭和二十七年に私が半年間の香港特派員生活を終えて帰ってきた翌年の、二十八年四月七日に生まれた。上の二人が女の子で、三番目にはじめて生まれた男の子であり、しかも末っ子になったのだから、私たちが特別にかわいがったのも無理はあるまい。

文夫の幼いころについては、昭和三十九年二月に作られた付属小学校四部四年生たちのすばらしい文集『桐志』に、「母の文」として妻が寄せた文章かのかつている。

文夫の幼時の思い出

杉本ツル

上二人女の末の男の子で、いくじない子供にならないように心配しておりました。

幼稚園当時は、遊び友達も女の子が多く、静かでやさしい子供でした。

自分のしたことや話に、自信が持てるようにさせたいと思い、お絵かきでも「こんなになっちゃった」と持ってきたときは、けっして見ず、「ぼく、力いっぱいいたらどんなになっても光がさしているようにりっぱなのよ」といいましたら、それからは「ぼく一生けんめいにか